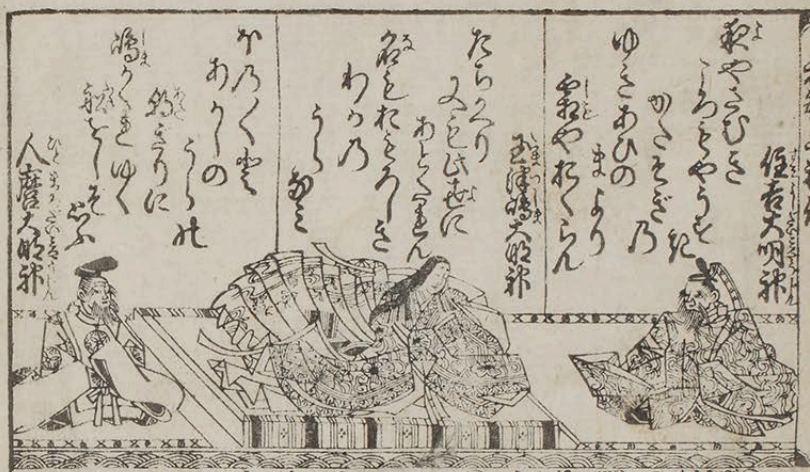
類纂題林

類纂物

万葉人百首大成

初んぬ　ちかい　あかつ　入

歌之数六百三十　上首　月次也



百人一首よみくせ

○百人一首　ひゃくにんいっしゅ　○天智天皇　てんちてんのう　○持統天皇　じとうてんのう　○山邊赤人　やまべのあかひと　○猿丸大夫　さるまるだいふ　○陽成院　ようぜいいん　○在原業平朝臣　ありはらのなりひらあそん　○文屋康秀　ふんやのやすひで　○喜撰法師　きせんほうし　○小野小町　おのの小町　○文屋朝康　ふんやのあさやす　○僧正遍昭　そうじょうへんじょう　○蟬丸　せみまる　○中納言行平　ちゅうなごんゆきひら　○在原業平朝臣　ありはらのなりひらあそん　○藤原敏行朝臣　ふじわらのとしゆきあそん　○源宗于朝臣　みなもとのむねゆきあそん　○大江千里　おおえのちさと　○菅原道真　すがわらのみちざね　○紀友則　きのとものり　○紀貫之　きのつらゆき　○凡河内躬恒　おほしかうちのみつね　○恵慶法師　えけいほうし　○源重之　みなもとのしげゆき　○大中臣能宣　おおなかとみのよしのぶ　○藤原義孝　ふじわらのよしたか　○藤原実方朝臣　ふじわらのさねかたあそん　○藤原道信朝臣　ふじわらのみちのぶあそん　○藤原伊尹　ふじわらのこれまさ　○藤原兼輔　ふじわらのかねすけ　○源等　みなもとのひとし　○藤原高光　ふじわらのたかみつ　○藤原朝忠　ふじわらのあさただ　○藤原実定　ふじわらのさねさだ　○藤原定頼　ふじわらのさだより　○藤原道綱母　ふじわらのみちつなのはは　○藤原清輔　ふじわらのきよすけ　○藤原実家　ふじわらのさねいえ　○藤原公任　ふじわらのきんとう　○藤原基俊　ふじわらのもとしゅん　○藤原道長　ふじわらのみちなが　○藤原忠通　ふじわらのただみち　○藤原俊成　ふじわらのしゅんせい　○藤原定家　ふじわらのさだいえ　○藤原家隆　ふじわらのいえたか　○藤原雅経　ふじわらのまさつね　○藤原実朝　ふじわらのさねとも　○藤原秀能　ふじわらのひでよし　○源実朝　みなもとのさねとも　○藤原定家　ふじわらのさだいえ　○藤原家隆　ふじわらのいえたか　○藤原雅経　ふじわらのまさつね

三十六人歌仙

左 猟師に浦の あまをみ ほのくやし

右 紀貫之 さくらちる 木の風を

左 持統天皇 春過て 夏きたる 白妙の 衣ほすてふ 天の かぐ山

右 柿本人麿 あしびきの 山どりの 尾の しだり尾の ながながし 夜を ひとりかも ねむ

元禄十三年庚辰 千三百年

拾遺集第三夏歌

左 河内国 いたづらに 過ぬる 月日 つもれば 年の 雪 ゆき

右 伊勢 三輪の山 いかに 待ぞ 人も 来ぬ 田の かりほ

柿本人麿

あしびきの 山どりの 尾の しだり尾の ながながし 夜を ひとりかも ねむ

元禄十三年庚辰 千三百年

拾遺集第三夏歌

山部赤人
人丸と同じ
猿丸大夫
時代人丸と同じ

中納言敦持
元禄十二年
千七十三
安倍仲麿
元禄十二年
千二百

左 中納言恵猫
右
左 中納言経忠
右
小野小町
花の色は
うつりにけり
我身
ながめせしまに
元禄十二年
八百七十八歳
時代伊達
古今和歌集

蟬丸
泰藏寺
和田平
八十嶋
海士の釣船
右
左

僧正遍昭
天つ風雲の
かよひぢ
吹とじよ
乙女の
すがた
しばしとどめん
元慶十二年と
八百七十八年に成
古今第十七
雜躰
陽成院
筑波ねの
みねより
おつる
みなの川
恋ぞつもり
て淵となりぬる
元慶十二年と
八百四十三年に成
後撰第十七恋躰

左
右
左
右
左
右

中納言行平
元禄十三年
八百七十七年成
右今月八新刊
右

藤原敦忠朝臣
伊勢

女歌仙三十六人

左　小野小町

右　武内宿禰

賢後
寺町通りの
ちぎりは天の川
あけくれの
つゆとかすかに

元良親王

わびぬれば
とてもの
あるべき
難波
なる
身をつくし
てを
あわむとぞ
思ふ

元禄十三年
八百十六度ノ版

後撰集十三
雅方

左　伊勢

右　在原業平

八重
咲
ちる
春の
山

元禄十三年
八百十七度ノ版

素性法師

今来んと
いひし
ばかり
長月の
有明の
月を
まちて
出つる哉

元禄十三年
八百十八度ノ版

後撰集十六
雅方

文屋康秀
吹からに秋の草木のしをるれば
むべ山風を
あらしといふらん
元禄十三年ト
八百十七匁三歩
右今年又秋ノ
大江千里
月見れば
ちぢに
物こそ
かなしけれ
わが身ひとつの
秋にはあらねど
元禄十三年ト
八百十七匁三歩
右今年又秋ノ

左　右近

月日は百代の過ぎ行く人も今いくとせ

左　右大将道綱母

宜秋門院丹後

左　右大納言公任

三条右大臣

左　右

嵯峨門院堀川

左　右

堀川右大臣

左　右

後京極摂政

左　右

後成恵

左　右

小倉の小倉三位　右大臣

正三位大納言　従大臣正一位

貞信公
小倉山
みねのもみぢ
ば
心あらば
いまひと
たびの
御幸
まちみん
元禄十三年と
七百六十八度ノ版
左
馬内侍
右
中納言兼輔
みかの原
わきて
流れ
いづみ
川
いつ
見き
と
人
元禄十三年と
七百八十九度ノ版

十二月和歌

源宗于朝臣

山がつの
垣ほ
さびしく
人もこと
とはまし
冬の
夜の
月

時代無補と同

古今集六冬ニ有

十二月柳

有ひさしき
風の
なれや
日と
なりて
そよ
ろ
わとやさの
柳

右

小侍従

ながらへて
つれなき
人の
つれなく
あるこそ
わびしき
乃
そのの
神

右

二月鶯

猟人の
雪
乃
日を
書
ふ
ふ
ん
梅

人の
枝
そら

右

元河内守植

元禄十三年ト
八百五十度ノ
歌

古今集六秋ニ有

左
右
左
右
王生忠岑
有明の
つれなく
みしは
あけぬる
物から
うきはかな
時代お月見
古今集十三番
元禄十三年
江戸吉原
古今集十六番

右
右
右
右
春道列樹
紀友則

七月
八月
右
左
右
左
右
菅原真風
紀貫之
元禄十三年
八百九十五匁

右 一宮紀伊
右
九月
清原深養父
元禄十三年庚辰
六百三十九文
右今年三月
右 相模
右
十月
文屋朝康
元禄十三年庚辰
七百八十九文
右撰年六秋分

和奇二聖人像

右今集序にいはく
いまゝ人のよろこぶ
所中にもあり
みなこの道にすけるこそ
ひろまり久しかるべき
なれば人のこゝろを
たゞしめ天地を
動かすこと和歌
なり○よやまのべ
の赤人とふ人あり
ありしこゝろおやく
しくあり久し丸八
赤人の名をたゞむ
なくわれ人をも人
丸ぐまさしたうと
とうとうあんあり
久保

十一月 枇杷

色の白いまの実
の
枝乃葉ゝを
葉をまもる
よ色
ちらしあく
かるゝの
江の流れ
あまの
の月
ひとり
山あひ
の紅

右近

わたつ海
身をば
わすれて
ちひろ
人の命
わすれぬ
わくらは

元禄十三年
五百に十
年成

拾遺第十に無之

孫六月 梅

梅の花
そ
ま
ゝと
ゝ
久ゝ
あまさう
宮乃
あづくゆまて
山名赤人
まこの野ま
ゝ
う
川
ひとよ
梅に
ゝ

十二月 子梅

ゝうむ江ねの
宮れうゝ
うのこゝ
自ふむゝうえ
水鳥
おりゝ
ゝう池乃
ゝよ
ゝ
宮の
ゝ
ゝ
ゝ

六歌仙

▲僧正遍昭はうくのさゑいえんなれどもまことにくのうちにみるべきけしきをうどんげごとく

▲在原業平はいそのかみのふることをあまりてしたしくいにしへのことをたづねしるにたりぬべし

▲文屋康秀はことばたくみにして初をもとゝすれどもはてはつよからぬかぜのふきしをれてしばしばとどまるがごとし

▲宇治山の僧喜撰はことばかすくなくして初をもとゝすれどもはてはあまりにあまりたるかのごとし

▲小町はいにしへのそとをりひめの風にあたれるやうにてつよからぬをんなのなやましきようにして花の色のうつろへるをながめしに我身もよのなかにふるまにまにおとろへぬるかなとよめるにたるべし

○文屋康秀の哀傷歌

青川竹乃葉こそ雪ふれ
なれはよろわひい
黄
拾ひ花葉の秋ふれ
ちりてこゝろの葉
あくそこそ
赤
ふれつゝ雲も日数
よそめられて紅葉
とちりて葉のこゝと
白
白雪のやうに月とも
山桜そこゝやをつく
緑
つよ
ひくまのやまけうつよ
くさやれとふれてひ
あれ春のこゝろ髪

○文屋康秀の哀傷歌

赤
恋とゝろ長のり夏どの

水
仁
火
金
土

清原元輔
元禄十三年と
五百五十八文三枚
中納言敦忠
元禄十三年と
七百五十八文三枚

源氏物語

出家八条院の
宮上西門院の
ことしや作りとた
作家さ花の友安
式部作なられ
石山こりて
物やわ月十五
夜の月明
仏のとこ
先をあわ
と作りしより
もむにうひ出
さうにうつ
岩に今夜八月十五
夜ありとあり
ひう色光とやう
氏七歳の
ことさう
家

女房方

それいあ
つよみとう
こうの紙法
てんよいうまれ
のち三日ゆの下
ようこうひ
そうこつひ
ぎの
尼具とりてわ
しめこつ
わい

中納言行忠

わすれ
そえて
ちい
ゆく
に
人をも
ゆかも
うらみけり

拾遺集

時代教ふと用

作者は琴の名人
うてい光源の
ゆ
ゆ
ゆ

桐

二けっきく
数のめぬ
ものやふ
おのの
あるも
うきに
ばりも
ばりも
ばりも

三うえせき
うえきの
身とかへて
本のに
なる
人の
ものの

まねをおそれつ
しむこころをあ
ひまつ〜しめんあ
ありっそつむとも
てあそぶ〜むっ
んいうこつひざ
ぬいこりのひざ
をけこむべさりの
あれぐそのはたは
ざとあっひはは
あるこうびつこめ
こうげまぜらう
とまつ〜しめんあ
ありねつこうて先
祖のたまやにまり
つげまろんの先祖
のまつりいふうぬ
たんこうをこあ
ねあれぐ勇といさ
ざよくしまの
さわうとまりて。
たこうまこぐう
ばいしこふまひ
あくまことつく

元禄十三年と
七百八十度二版

新古今第十一
恋の部

元禄十三年と
七百八十度二版

恋の部

恋のみられ
しのぶ
人こうね
秋のきかぜ

恋の法師
いの手
しぼれる
やどれ
しぼ
人こうね
秋のきかぜ

拾遺第十七秋の

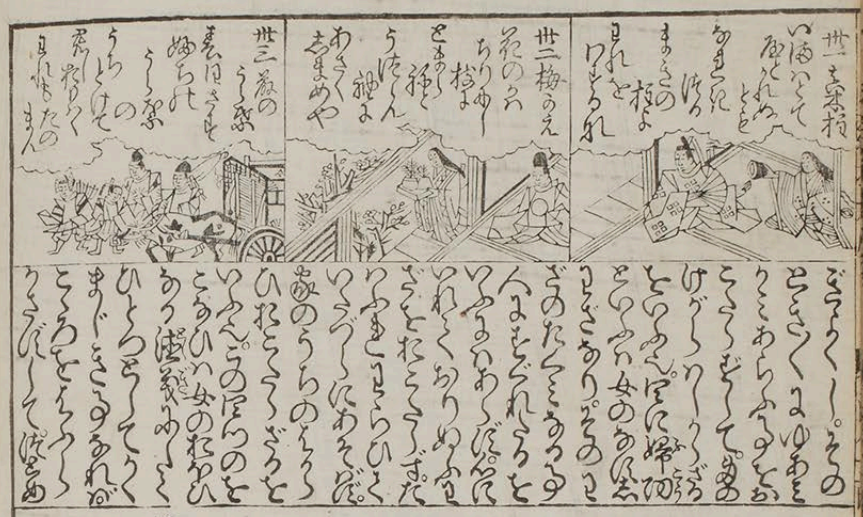
源重之
元禄十三年庚辰
七百二年更改
大中臣能宣朝臣
元禄十三年庚辰
七百二年更改

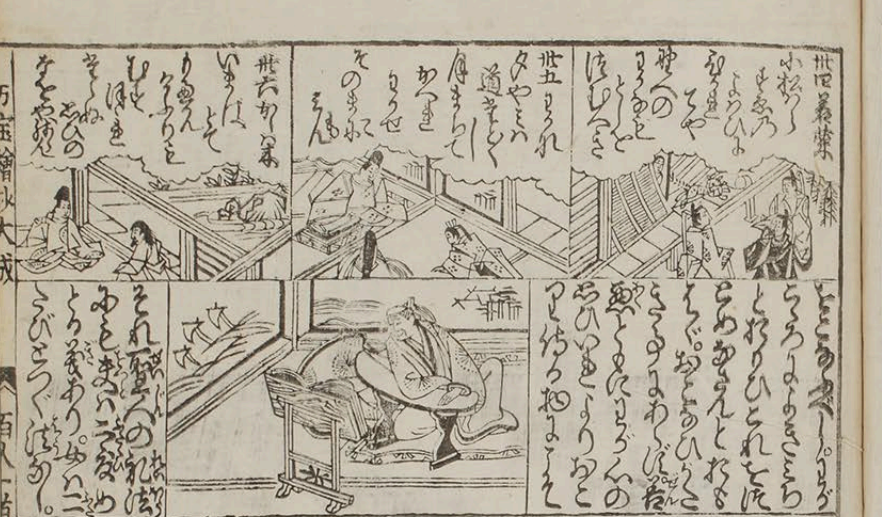
菅原義孝
元禄十三年庚辰
七百九十三番
拾遠第十二巻
孫康実員
元禄十三年庚辰
七百九十四番
後拾遠第十一巻

菅原道真朝臣
元禄十三年庚辰
六百九十度之版
後撰集第十二恋の部

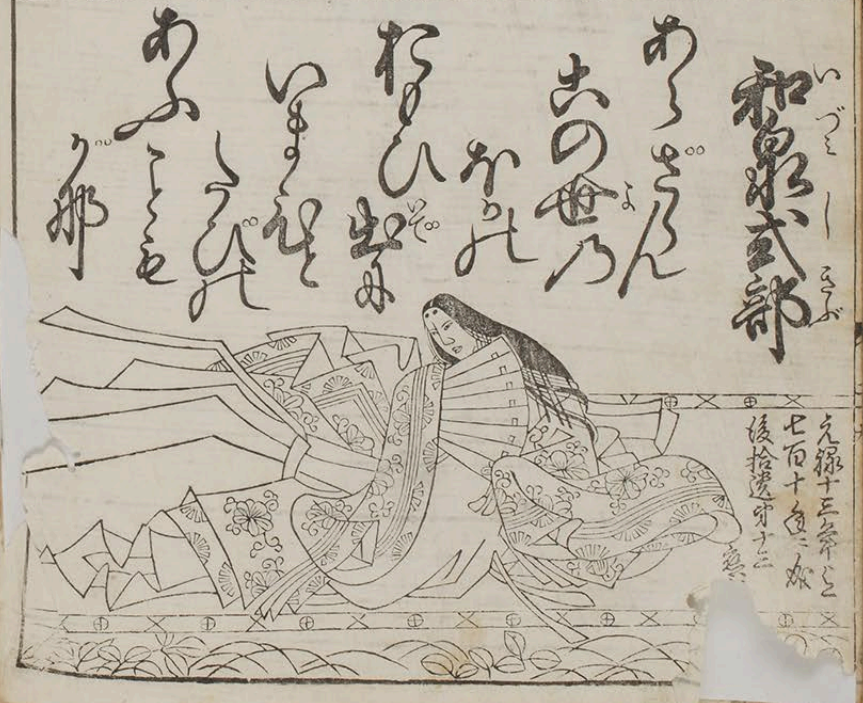
右大将道綱母
元禄十三年庚辰
七百九十度之版
拾遺集第十二恋の部

俵屋三百母
元禄十三年ニ版
七百十年ニ版
大納言公任
元禄十三年ニ版
七百十年ニ版
千載集第十六
雜部





雜式部


和泉式部

世七 横笛
世八
世九
世十
世十一
世十二
大貳三位
赤染衛門
七百十六首
後拾遺第十二
元徳十三年と
六百五十首
後拾遺第十二

小式部内侍
大江山
いくの
道の
遠
ふみも
見ず
あまの橋立
伊勢大輔
いにしへの
奈良の
八重桜
今日九重
匂ひぬるかな

清少納言
後拾遺第十六
雜部
時代同前

左京大夫道雅
後拾遺第十三
定家
定家十三歳ニ
八百十年ニ成

月六百年余
千載法六
冬冬帝

六百四十年余
後拾遺兼家

元禄十三年ニ成
六百九十年ニ成
金象第九雑部

元禄十三年ニ成
五百五十年ニ成
千載第十六雑部

三條流
元祿十三年ヨリ六百八十ヨ二ヨル
後撰遺集十五雜ノ部
元祿十三年ヨリ六百五十ヨ二ヨル
後拾遺集十八恋ノ部

良遍法師
ちぢのさふ
春夜そら
しく
恥まつ
いぼこも
おれり
秋のくれ
大納言源信
ゆふ雨を
門田の
ほそ
ほれく
あしの
まの海やよ
秋の夕ぐれ

右五流るかい
右に白貝 漢人家紋
右五 松ぜと貝
右五流るかい
右に白貝
右五流るかい
右に白貝
右五流るかい
右に白

源頼朝卿
藤原基俊
元禄十三年
千載集十二

源重昌　あはぢしま

淡路島かよふちどりのなく声に いねがてぬ　須磨の関もり

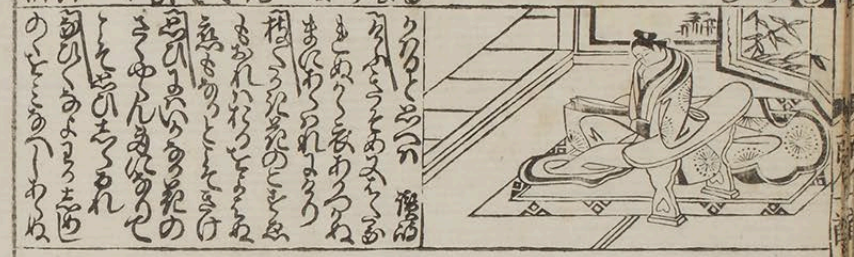
元禄十三年三月

源大夫能頼　さきたのだいふ　わさをけ

秋風に　そよぐ　もの　あえ　海ちり　もしれ出る　月の　新堂　げ　さやあき

元禄十三年三月

琴乃組



千載集十二
雑ウ

元永十三年と
五百四十年に成

千載集三夏ニ

元永十三年と
五百四十度に成

道円法師
元禄十三年ニ
五百三十五歳ニ成
千載才十三
雑部
皇太后宮大夫俊成
元禄十三年ニ
六百一年ニ成
千載才十三
雑部

菅原道真
元祿十三年庚辰
五百八十度
千載才十二五六の

西行法師
なにおふとなく
月やいと
ものを
わすれぬ
かもろ
ごろかな
我面ゑ
元禄十三年
五百九十二歳
千載集十八
○女中歌のこゝろ
寂蓮法師
ひとこゑも
なくぬ
ほとゝぎす
槙の葉ゝ
雨そそ
のぐる
秋哉
元禄十三年
五百九十二歳
新古今集十八秋哉

なにはづの
男のあり
ぬ
一葉
なへ
男と
たくてや
高とろべよ
貞和院別當

元徳十三年と
五百七十二首三位
千載集十二
藤原

式子内親王
むすび
ゆえ
ば
ぬ
なが
へば
ぬ
ふる
ものの
ようり
ぞ

元徳十三年と
五百三十二首三位
新古今集十一
藤原

殿員院大納言
見勝
をゝ海の
あまの
神ふを
ぬきめぞ
始終
ちとかつぐぞ

元禄十三年ゟ
五百二十二度ニ成
子載分十六冬

汲来極楽の前者設官
蓋哥や
東西の
小道
衣かつき
ひとり
この孫ん

元禄十三年ゟ
五百二十度ニ成
新古今集分六冬

二條流禮法
我神も
みそぎ
沖の石
人こそ
かくれ
元禄十二年
五百五十五歳
千載才十二番
操令右衛門
世界も
法師も
かくれ
なしぬ
蓋はとぶ
の
法そ
元禄十二年
四百九十五歳
新勅撰才八
摂関家

参議雅経

みよしのの山の秋風さよふけて
ふるさと寒く衣うつなり

前大僧正慈圓

わたの原こぎ出でぬと人には
つげよあまの釣舟

うきよのなかをいとふまでは
世をのがれ山の奥にも鹿ぞなく

○女中文
道花文段尾
元禄十三年
新勅撰第十八
元禄十三年
五百三十二
新勅撰第十三

遠浦帆
風ひかふ
雲のうた
海とそ
ひろ
ひぬ
ふ
ふ
ふ

44299

寶永四歳
亥三月吉日
伊賀屋弥兵衛
大坂心斎橋北助順慶町
柏屋清右衛門

x·rite ColorChecker® Color Rendition Chart